

# 地勢難克服手段としての遊園・旅館による観光鉄道兼営

——箱根松ヶ岡遊園・対星館の資料紹介を中心に——

小川 功

## Additional Construction of Sightseeing Cable Cars in order to Get over Topographical Weak Points of Amusement Parks and Hotels; Concerning with the Introduction of Historical Materials on *Matsugaoka Park* and *Taiseikan Hotel* at *Hakone*

Isao OGAWA

### はじめに

一般的に遊園地・旅館等の観光施設・宿泊施設の宿命として地形・地勢・地盤等の自然的制約を乗り越えてまでも、ともすれば顧客の享受し得る眺望性（または温泉利用性など）を極限まで追い求めがちな結果、当該施設の立地はより高く、より険しい、より不便な人跡希なる場所にまで求められ、逆に顧客が施設に來訪する際のアクセス条件を著しく不利・不便なものに劣悪化してしまうという危険性が認められる。こうした観光施設に避けがたい眺望性と接近性との間の二律背反ないしジレンマを解消ないし緩和する手段が、立地上不利な観光施設の経営者自らが巨費を投じてまで交通機関の経営に直接的に関与し、自らに有利な交通接近条件を進んで獲得しようとする一連の行動である。すなわち観光経営者自ら送迎用自動車を購入するという最もポピュラーで安価な対策から、自ら乗合自動車業を経営し、さらに一歩進んで自己に好都合な観光鉄道等の敷設に尽力して、自己に有利な立地に改革しようとするといった諸行動である。

その最も端的で単純なプロトタイプが本稿でとりあげる地形上難点ある遊園地・旅館等の経営主体が私設の簡易な「専用ケーブルカー」という一種の観光鉄道を自らの負担で設置する場合である。今回は箱根・堂ヶ島の遊園地・ケーブルカー等を総合的に多角経営した有力旅館主の事例を当時の遊園地・旅館等の絵葉書・案内用パンフレット等<sup>(1)</sup>の資料紹介をベースに解析を試みた。観光に関する多角経営は多くの場合大規模な私鉄資本を中心に語られることが多く、筆者もその視点から主に関説してきた。しかし規模はさほど大きくはないが、旅館主らが中心になって旅客誘致施設として遊園地を設置し、時には輸送上の必要から観光目的の鉄道まで建設する場合が少なくないことに気付いた。これは単に遊園地内の遊戯施設としての鉄道にとどまらず、地形的な必要から公共交通機関としての性格を有する観光鉄道に昇格した場合もみられ、この場合は一般の鉄道と同様に鉄道省文書等の官庁資料の活用も可能となる。

株式会社を常態とすることが一般的な鉄道企業とは異なり、多くは閉鎖的な個人企業形態である家業の域を出ない旅館業者の経営分析には資料の入手面で大きな制約がある。そこで今回は特に雑資料と見なされ公共図書館等でも系統的資料収集が行われ難いパンフレット・絵はがきなどの観光資料を駆使して、可能な限りでの試論を提示したい。実は筆者も昭和35年12月南紀・新宮市の丹鶴城跡を見学した際に、旅館二の丸の簡易ケーブルなる代物に初遭遇し、以来この種の観光施設に興味を抱き、資料の探索に努めてきた。

今回は長崎大学附属図書館の「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」(長崎大学学術研究成果リポジトリ)<sup>(2)</sup>による箱根堂ヶ島周辺の豊富な古写真群のweb公開と的確に付された解説から多くのご教示を得たことを特記しておきたい。

## I. 松ヶ岡遊園地・対星館専用ケーブルカーの概要

明治後期六甲山麓に置かれた大谷光瑞の「二楽荘」<sup>(3)</sup>は専用ケーブルカーを3基も設置した豪華別荘の代名詞でもあった。二楽荘は後年一時的に一般開放<sup>(4)</sup>され、阪神電気鉄道沿線の観光施設として人気を集めた。かかる乗り物設置を別荘主の数寄者の行動として捉えれば、二楽荘が山上に向かって上昇する並みのケーブルカーであるのに対し、本稿のは意表を突く存在である。ケーブルカーという乗り物は高い所に登るための手段だという常識を覆すが、深い谷底に転がり落ちていく松ヶ岡（堂ヶ島）ケーブルカーである。

松本清張の推理小説『蒼い描点』には「溪谷の下になっていて専用のケーブル」がある「坊ヶ島の対溪荘」<sup>(5)</sup>として登場する。この小説は対星館と隣接の大和屋をモデルに『週刊明星』創刊号の昭和33年7月28日号から34年8月30日号まで連載された<sup>(6)</sup>。「旅館専用の空中ケーブルは、宿がちがうから二つある」<sup>(7)</sup>という特異な運輸機関の組み合わせが推理上の重要な鍵となっている。即ち坊ヶ島の旅館は「谷底になっていて、宮ノ下の温泉場からケーブルで降りる仕かけになって…一軒は対溪荘さんで、一軒は駿麗閣さんです。どちらも専用のケーブルカーをひいて」<sup>(8)</sup>いとされる。松本清張の表現によれば、「女中がそこにて『いらっしゃいませ。どうぞ』と、とまっている専用ケーブルカーをさした。それから、下の到着点に待っている宿の客に、客の下降を知らせるため、リン、リンとベルを二つ鳴らした。ケーブルカーの客は竜夫と典子の二人だけで、宿の若い男が運転していた。断崖の下にある旅館の屋根が少しずつ大きくなり、せりあがってきた」<sup>(9)</sup>となる。小説と現実の相違点は小説ではアリバイ工作の必要から共に同種の「空中ケーブル」（ロープウェイ）となっているが、現実の対星館は専用鋼索鉄道であり、一方の大和屋は普通索道であった<sup>(10)</sup>。

対星館の「ケーブルカーは同館がガケ下にあるため客の送迎用に昭和五年から使っている」（S41. 11. 24 朝日<sup>(11)</sup>）由緒ある歴史的な「私設ケーブルカー」であり、小説通り「ガケ上の運転所で係員三人が運転に当っており…ブザーで下に知らせてから動か」（S41. 11. 24 朝日<sup>(12)</sup>）す方式で、「軌道の長さ約三百メートル、平均こう配三十度で、車体を水平に保つため台車との間に約七十センチの空間」（S41. 11. 24 朝日<sup>(13)</sup>）を設ける特殊な構造であった。対星館の広告によれば「足柄下郡箱根町宮の下七二（〇四六〇-二-二二八一）にあり、明治十五年にこの地を購入した人が『明星ヶ岳にそそり立つ館』という意味で名付けた。箱根国道から自家用ケーブルで早川までおりるのが特色。五十六室あり、約百五十人収容。温泉は室町時代の名僧、夢窓國師が開湯したと伝えられ…」<sup>(14)</sup>と「自家用ケーブルのある宿」を売り物にしていた。『知られざる鉄道』にも「軌間762mm…距離約0.3km所要時間約7分、営業開始昭和5年、運賃無料（宿泊客のみ）」<sup>(15)</sup>との情報を載せている。

平松・宮田らによる後述の「松ヶ岡遊園」開設・拡充より以前に箱根には塔の沢温泉・玉の湯旅館主の堀貞蔵や藤屋旅館が各々旅館の対岸に散策場・遊技場等を開設、玉の湯を継承した館主の子安峻が明治24年に浴客の憩いの場として「滝の前遊園」（湯本、p147）を開園、底倉温泉の旅館「蔦屋の私有地なれど…蛇骨川に面せる山腹を利用して作り…山中特有の高山植物を移植して浴客の散歩園」<sup>(16)</sup>とした「蔦屋高山園」約1万坪の植物園の造園など数多くの先行造園事例がある。さらに三河屋の榎本恭三が移植した「四季花卉絶ゆる事なき広大な遊園」（箱根）である三河屋旅館附属蓬来園や、小田原電気鉄道による強羅園（湯本、p148）など、より規模の大きい本格的な遊園へと発展していく。

## II. 平松別荘時代と荘主・平松甚四郎

明治19年ころ<sup>(17)</sup>平松甚四郎（東京市日本橋区兜町30）は「東京でのコレラ流行を嫌い、堂ヶ島温泉の老舗奈良屋の跡地」（長大）である堂ヶ島温泉調への滝の近傍の足柄下郡温泉村（現箱根町）底倉（現宮ノ下）字堂ヶ島七二番地ほかを購入した。購入価格は不詳であるが、「平松銀行の跡片付」（M25. 12. 24 東朝<sup>(18)</sup>）を担当した阪井保佑の財産調査書類の中に「箱根塔の沢地所金八千円の登記済書」（M25. 12. 24 東朝<sup>(19)</sup>）が含まれており、購入額は8,000円見当かと推定される。「元湯奈良屋六郎兵衛は転業せしにや同家の跡は平松某（銀行）の別荘となれり。閑雅の住居にて最も良し」（温誌、p31）、「志らべの滝 宮の下奈良屋の庭中より落来る水にて上下二段となり平松某別荘の前に落つ。此滝日光霧降の滝に能似て最も美観なり」（温誌、p36）などと評されたように、平松は翌20年ころまでに、調への

滝の水を引き、「白糸の滝 別荘中に囲ひ込」(温誌、p45)んで庭園を整備し、貴重な建材「神代杉」を使って「茶室書房等結構極めて洒落にして風韻甚だ幽雅なり」(箱鉦、p26)と評された「平松別荘」を建築した。箱根に日本人資産家の別荘時代が到来するのは明治30年代からであり、平松別荘は先行していたベルツなどの外国人やごく一部の日本人別荘とともに先駆的な存在であった。明治20年以降に撮影された堂が鳥温泉の眺望写真(長大)では近江屋、大和屋、丸屋、江戸屋、平松別荘等の姿が確認できる。さらに「平松甚四郎が、自らの別荘に併せて松が丘遊園・向が丘<sup>(15)</sup>遊園を開い」(湯本、p148)た事実も遊園地の発達史上注目されてよからう。遊園地が数多く集積した阪神間でも明治39年辰馬半右衛門が鳴尾に百花園を開園、40年香野蔵治、樋山慶治郎が香榭園を開園し、これ以降私鉄等による遊園地が各地に開設される<sup>(16)</sup>。この時期の「松ヶ岡遊園」は「早川に架せる小橋を渡り、一小茅屋の前を過ぎ小橋を渡れば園内に入る。洒落なる茶亭、自然の庭園、一度此園に入れば奇景帰るを忘る」(箱大、p44)「其天然の風致の超越せる点に至りては蓋し箱根勝区の首位たり。而も未だ人に知られざる仙境にして…緑陰深き所に閑雅なる茶亭あり。其結構極めて洒落、其幽翠なる風景転た人を襲ふの想あらしむ」(箱案、p75)などと紹介された。

別荘主兼松ヶ岡遊園主の平松甚四郎(日本橋区兜町三十番地)なる人物は「公債証書諸株式等の売買を以て世間に知られた」(M22.3.29 東朝①)「日本橋区兜町 各公債証書諸株券金銀貨幣直取引所 泉屋両替店」の経営者で同時に、同一場所で私立銀行たる有限責任平松銀行主を兼ねる銀行・証券兼営業者であった。平松は「公債証書及び株式抵当の売買、金銀売買等」(M23.6.22 東朝②)を行う一方、同時に第百三十二国立銀行「株式千五十余株余、即ち五万二千余円を所有」(M23.6.22 東朝②)して頭取の座にも就き、内国通運協議委員、日本橋区の所得税調査委員(明治20年～明治21年)等を兼ねた。また東京株式取引所の有力株主の一人で、明治21年7月30日営業延期願を株主総代の一人として渡辺治右衛門、平沼専蔵、山中隣之助、岡本善七ら斯界の大物と並んで農商務省へ提出した。(M21.7.31 東朝②)

しかし栄華を極めた平松家にもこの後相次ぎ不幸が襲う。まず平松は平松別荘を建ててまもなく22年3月27日死亡した。(M22.3.29 東朝①)『明治過去帳』には防海費二千元を献納した銀製黄綬褒章者<sup>(17)</sup>として記されている。さらに家督相続し平松甚四郎を襲名した二代目<sup>(18)</sup>が主宰する平松銀行<sup>(19)</sup>は明治23年5月10日ごろ「殆んど一身同躰とも云ふべき」(M23.5.10 東経)関係にあった第百三十二国立銀行<sup>(20)</sup>と「同時に支払を停止するに至」(M23.5.10 東経)った。銀行家をやめた二代目はその後明治29年では絵入新報編輯員(紳 M29、p776)、30年では東京新聞社員(紳 M30、p708)に転身するなど、文筆も得意な数寄者の人物かと推測される。

25年12月末では「平松銀行の跡片付」(M25.12.24 東朝③)を担当した阪井保佑が「箱根塔の沢地所金八千円の登記済書」(M25.12.24 東朝③)を保管していたので、銀行の整理を進める過程で、箱根物件の換価は未実現であったと思われる。その後執達吏の手で平松への強制執行が行われ、26年11月では既に平松「甚四郎財産とてなきもの」(M26.11.16 東朝②)と認定された。「平松某氏の別荘」(M28.7.27 東朝③)も遅くとも28年7月時点には売却済みで、次節の旅館等に順次転用されたと考えられる。

### Ⅲ. 宮田別荘時代と荘主・宮田藤左衛門

#### (1) 五段旅館・龍雲館(安藤りう経営)

明治30年11月19日敷地72番地の土地閉鎖登記簿によれば温泉村底倉69に住む近隣の島順助<sup>(21)</sup>に売却されたが、別資料による館主名と一致するとは限らない。(以下同様)これに先立つ28年7月27日の新聞に掲載された「宮の下と堂ヶ島との中間にあり、建築の清雅なる五層楼」(M28.7.27 東朝③)の龍雲館の開業当初の宣伝文句によれば「故平松某氏の別荘にして各室とも数寄を尽して建築したるものにて、函山無比の一仙境なり」(M28.7.27 東朝③)とある。従来の先行研究では近接する五段旅館と平松の関係まで言及したものは少ないようだが、この記事では平松別荘の建築をそのまま旅館に転用したと明記される。源泉は「底倉万年橋の下に湧出す石風呂より五百七十余間の樋を以て楼内に引用する」(M28.7.27 東朝③)のものであった。記事の翌月龍雲館に宿泊した依田学海は「十八日堂島に移る。龍雲館に宿す。ここは瀧屋と称せし所なり。今は宮下の藤屋…の開きし所なり。門前の大瀑を葉隠といふ。又その家の結構きはめてよし」<sup>(22)</sup>と日記に記すように平松別荘を転用した旧「瀧屋」を藤屋安藤家の近親者が昨今新たに龍雲館として開業したことが判明する。30年の案内書の記述にも従前の丸屋がなく、新築の温泉宿として龍雲館が加わっ

ている。「温泉宿大和屋には猶ほ〈夢窓〉國師の真筆を秘蔵せり。当地温泉宿は大和屋為太郎（小蓬菜館）、近江屋半之丞、江戸屋茂与次郎の三軒にして、大和屋定めの宿料は一週間一等三円、二等二円五十銭、三等一円七十五銭、四等一円五十銭、他の二軒も凡そ是と同様…其西に離れて新築の温泉宿あり、安藤りう（龍雲館）と云ふ」<sup>23</sup>

龍雲館女將の安藤りうは明治10年富士屋ホテルに買収された藤屋旅館の経営者たる安藤一族で、所得税3円00銭、営業税12円であった。（日韓上、p99）「龍雲館 安藤りうの経営するところにして…五層なるの故を以て俗に五段とも云ふ」（箱案、p69）と言われた五段旅館は宮ノ下と堂ヶ島の間位置し、両端を調べの滝と白鷺の滝が流れ、滝見には絶好の立地であった。大町桂月も「宮の下…奈良屋の下に龍雲館あり。崖に寄りて五層楼を築けり」<sup>24</sup>と記している。明治43年10月27日敷地はさらに本多半右衛門（柿下郡国府津村）に売却されたが（土登）、「調の滝は宮之下近道の登り口の元平松氏別荘の構内にありて、遊覧に便ならず」（箱案、p74）と別荘主の名前は出てこない。松ヶ岡遊園は「其天然の風致の超越せる点に至りては蓋し箱根勝区の首位たり。而も未だ人に知られざる仙境にして…緑陰深き所に閑雅なる茶亭あり。其結構極めて洒落、其幽翠なる風景転た人を襲ふの想あらしむ」（箱案、p75）と評されている。

明治43年8月「堂ヶ島の温泉宿大和屋の別荘一棟流失し…堂ヶ島にては住民十一名行方不明をなりし見込なり…（十一日午後三時小田原電話）」（M43.8.12 東朝）と報じられ、横浜貿易新報には「堂ヶ島大和屋別荘前の崖 全く崩壊し家屋の一部残れる光景」（M43.8.19 浜貿①）の写真が掲載されたが、元平松別荘もこの時期の早川の洪水で一部流失した模様である。（長大 6-9-0）また大正12年9月の関東大震災で奈良屋の西洋館、蔦屋（湯本、p193）などとともに、この五層楼も倒壊<sup>25</sup>するなど平松別荘も往時の姿を喪失した。大正2年の旅館<sup>26</sup>は宮下に奈良屋、龍雲館、藤屋ホテル、堂ヶ島に大和屋、近江屋、大正5年では「堂ヶ島 宮の下の溪谷中、早川の岸に在り。四面丘陵相迫って地形播盆の底に似たり。宮の下郵便局の側よりすれば、凡そ三町にして至るべし。浴舎には近江屋、大和屋あり」<sup>27</sup>とされた。

大正元年9月20日敷地は静岡県駿東郡御厨町の渡辺久太郎、駿東郡高根村の土屋周平（修兵衛）に売却された。（土登）しかし買主側の資金難からか債権者たる駿河銀行が競売を申立て、瀬戸豊作（駿東郡富士岡村）を経て5年11月17日宮田藤左衛門（銀座3丁目5）が72番ほかの土地を取得した。（土登）

## (2) 新別荘主の宮田藤左衛門

宮田藤左衛門（東京市京橋区銀座3丁目5）は玉屋、時計、測量器械商、所得税95,875円（紳 M29、p726）、「玉屋と称し時計眼鏡測量機械器具商店として都下屈指の巨舗たり」（大人、p453）とされた。宮田の履歴は以下の通り。「時計、眼鏡、測量機器商として著名なる合名会社玉屋商店の代表社員なり。東京の人宮田藤翁氏の長男にして文久元年十二月九日を以て生れ、幼名を藤之助と呼ぶ。明治十二年家督を相続し同二十四年其名を改む。夙に時計眼鏡等の老舗を以て称せられ後其組織を改めて合名会社となすに及び代表社員となりて其経営に当り、孜々発展に努めて盛況旧時に倍するを見る。（東京市芝区三田一ノ二七電話芝三八七九）」（実辞、ミ p7）

明治10年ころ京浜有力時計商で結成した「開時會」員、24年「父君の藤翁と改名するや、君乃ち父君の名を襲ぐ」（大人、p453）、27年大日本度量衡協会副会長就任、30年新居常七（近常）、小林忠三郎ら京浜の有力な時計商仲間と日本懐中時計製造合資会社（根津、資本金5万円）に共同出資したが、数年後に同社は破綻した<sup>28</sup>。

33年4月工商銀行を東京に設立（変遷、p251）、頭取に就任したが関係する日本人造肥料<sup>29</sup>救済のため「同銀行より四万余円を引出し、遂に損失を負はしめ」（M36.11.10 東朝）、整理を余儀なくされ35年12月13日に日宗興業銀行と改称した。（変遷、p251）

43年ごろまで恩賜の時計を宮内省に納入、大正9年玉屋争議が勃発し、測機舎が分離独立した。（S6.12.30 大朝）昭和6年では銀座3丁目2-5時計・貴金属・宝石商の合名会社玉屋商店代表社員（丸紳 S6、p673）であった。

平松以降、宮田以前の平松別荘の持主は多く「元平松別荘」とだけ書かれ、持主名が出ず、当時の山田万作編『岳陽名士伝』明治24年をはじめ、『商工信用録』等にも記載がないなど、概して資力が乏しく、従って別荘の大規模な拡充はあまりなかったものとみられる。これに対して宮田にはかなりの財力があって、先順位抵当権を抹消させた後、当該物件に抵当権を設定することなく購入しており、以後資産家の宮田の手により一帯の観光開発が次節に

みるように積極的に推進された。

### (3) 宮田家による開発・ケーブルカー敷設

大正6年森永規六は「堂ヶ島 宮ノ下から約六丁、名所には夢窓國師閑居趾、松ヶ岡遊園、白糸ノ滝、明星ヶ岳等で、旅館には近江屋、大和屋が在る」<sup>90)</sup>として名所に松ヶ岡遊園の名をあげている。大正8年の「箱根温泉宿組合議案及決議書綴」(温史、p426)では堂ヶ島は近江屋(安藤ハツ)、大和屋(森半次郎)の二軒のみ、電車が開通した大正9年では「堂ヶ島温泉 宮ノ下の崖下三町余、宮ノ下駅より駕籠賃六十銭。箱根諸温泉中幽邃第一の境、早川の溪谷の底に在り…旅館は大和屋、近江屋」(鉄温 T9、p12)と、いずれも堂ヶ島温泉の旅館は大和屋、近江屋等で、対星館の名はまだ登場して来ない。

谷口梨花は「箱根名所図絵」の大正中期の版で初めて対星館の名を出し「堂ヶ島温泉 宮の下より三町余、箱根諸温泉中幽邃第一の境、早川の溪谷の底に在り、温泉は単純泉で温度百十八度…旅館は大和屋、対星館、松ヶ岡遊園。此処には夢窓國師の閑居したといふ趾もあり、白糸の滝、調の滝、葉隠の滝、三日月の滝等涼味掬すべき境である。…各所温泉旅館及電話番号…(堂ヶ島温泉)対星館 電話宮の下四六番、大和屋 電話宮の下一一番、松ヶ岡遊園地貸別荘 宮田家経営 電話宮の下四六番」(箱図)と書いている。震災後の記事では堂ヶ島温泉には「貸別荘はある」(T13.6.18 東朝)とし、「付近名勝松ヶ岡遊園」(T13.6.18 東朝)を挙げる。

対星館と松ヶ岡遊園の電話が同じ宮の下四六番であることから、貸別荘ともども宮田家の経営と推測される。印刷をした大参社(妹尾春太郎)が出版社として大正15年4月20日発行した小冊子『相豆温泉案内誌』にも宮田家の関与の記述がある。

「堂ヶ島…温泉宿には大和屋(電宮一一)、対星館(電宮四六)の二戸あり。外に松ヶ岡遊園地 貸別荘 宮田家経営あり。…松ヶ岡遊園地 堂ヶ島にあり。奇岩怪巖起伏するに溪流奔激して緑陰深き所に飛瀑多し。最近宮田氏資を投じて改善なし、園内大浴室を設け、百草を移植して四季の縦覧客を迎ふ。調の滝…宮田氏別荘調瀑園の構内に圍ひ込まれあれど、遂間近なる垣によりかかちて眺むることを得。三日月の滝 宮田氏別荘の裏面にあり…愛染の滝 堂ヶ島松ヶ岡遊園地内にあり…」(相豆、p21)

これを同じ谷口梨花のベストセラー『汽車の窓から』(大正7年6月初版、大正9年11月34版)の箱根の記述と対比すると、「対星館、松ヶ岡遊園。此処には…」の部分は、大正15年時点において「最近宮田氏資を投じて」、平松別荘時代に開設された松ヶ岡遊園の震災復旧を含めて「改善なし」た園内の名所を追記したことが判明する。一帯は『相豆温泉案内誌』の表現によれば「縦覧客を迎える公開された「松ヶ岡遊園地」部分と、「垣」で「圍ひ込まれ」たプライベート・エリアたる「宮田氏別荘」部分とに明確に区分され、別荘部分は当時「調瀑園」と呼ばれていたことも判明する。現・対星館のホームページによれば「調べの滝の前にある」現「神代閣」は「その昔、平松別荘と呼ばれた建物を客室にしています。貴重な建材「神代杉」を使っていることから、この名があります」(対星)と解説するので、宮田別荘時代の「調瀑園」であろうか。大正5年購入した別荘主である宮田が大正9年以降に順次従前の松ヶ岡遊園を「資を投じて改善なし、園内大浴室を設け」、貸別荘ともども宮田家の家業として営業したと考えられる。

大正12年9月の関東大震災では堂ヶ島の近江屋、大和屋等は「震災で破壊され」(T13.6.18 東朝)、松ヶ岡遊園も同様に被害を受け大正13年6月現在「目下修理中」(T13.6.18 東朝)であった。「宮田」は震災後に石碑に彫られた文面にあるように「此地に遊ぶもの数百の峻坂を昇降するに不便あり。これを憂ひ索道を敷設」したのであった。この点については後段で資料を紹介する。

堂ヶ島が近年交通が不便になった理由は江戸期の箱根七湯を結ぶ温泉道は湯本～宮の下～底倉を経て元箱根に達していたが、明治20年以降に富士屋ホテルの山口仙之助、ついで芦の湯の松坂屋・紀の国屋ら旅館主の努力により湯本～元箱根間の新道が明治37年に最終的に完成して堂ヶ島の遙か上方を通過してしまったため道路から取り残され、冒頭に紹介のごとく谷底状態に陥ったことによる。明治20年の案内書にも「此所〈堂ヶ島〉の景に富と雖も道路の不便なると湯宿の古びて手を入れざる故にや…大に衰微の色を現し山上の宮の下とは雲泥の相違なり」(温誌、p33)とある。

#### (4) 昭和戦前期の対星館

以下戦前期の対星館の記事を観光案内等から抜き書きするにとどめ、次節において資料紹介の中で営業の様子をみることにする。

大正15年6月発行の『全国旅館名簿』には大和屋（森半次郎）、近江屋（安藤ハツ）よりも先に、「堂ヶ島 対星館 藤田ヨシ 宮ノ下 四六」（旅館、ヌ p7）番が記載されている。館主の藤田ヨシは昭和6年9月設立の合資会社対星館無限責任社員に就任し、昭和15年の組合名簿にも登場（温史、p427）する女将であるが、宮田との関係に言及した文献は未見である。また大正15年8月発行の案内書にも「堂ヶ島温泉…温泉は単純泉温度は百十八度。宮の下の崖下から湧くのを汲んで来る、調の滝、白糸の滝、松ヶ岡遊園がある」<sup>31)</sup>と記載されている。

大正15年11月富士屋自動車発行『遊覧の栞』には「堂ヶ島温泉…温泉旅館は大和屋（電話宮の下一番）対星館（電話宮の下一二番）等で、付近に松ヶ岡遊園地あり、浴後の御散策に最も適して居ります」<sup>32)</sup>とあり、これ以降多くの案内書類に以下に見るように対星館と松ヶ岡遊園地の名前が頻繁に出て来る。

昭和2年「堂ヶ島温泉 宮ノ下の崖下三町余、箱根諸温泉中幽邃第一の境、早川の溪谷の底に在り…旅館 大和屋 室数二〇 宿泊料三円以上六円。対星館一八 三円以上六円」（鉄温、p14）

5年「大和屋 森半次郎 同〈箱根宮の下〉11番、客室数22、客室畳数150、宿泊料3.0~7.0円、内湯有

対星館 藤田佳 同〈箱根宮の下〉46番、203番、客室数30、客室畳数246、宿泊料4.0~7.0円、内湯有」（旅名、p49）

6年9月合資会社対星館が旅館料理店を目的に資本金10万円で温泉村底倉堂ヶ島に設立された。無限責任社員は前述の藤田ヨシ（温泉村底倉）であった。（諸 S10、上 p792）6年9月9日敷地所有者の宮田と合資会社対星館との間で敷地の売買予約が締結、7年6月11日所有権移転登記がなされた。（土登）

8年箱根登山鉄道が発行した「HAKONE 箱根1933」には「堂ヶ島温泉 単純泉 宮ノ下駅より東五丁、旅館名大和屋、対星館。名所旧跡白糸ノ滝、調ノ滝、葉陰ノ滝、三日月ノ滝、夢窓國師閑居跡、松ヶ丘遊園地（ケーブルカー）」とある。

10年10月1日同じく同鉄道が小田原~強羅間直通運転を開始した際に発行した「箱根登山電車沿線図」裏面の「箱根十二湯」案内にも「堂ヶ島温泉 宮ノ下駅より下り三丁、「ケーブルカー」あり。泉質弱塩類泉。旅館大和屋、対星館。付近名所白糸ノ滝、調ノ滝、葉陰ノ滝、三日月ノ滝、夢窓國師閑居跡、松ヶ岳〈岡の誤〉遊園地」とある。8年版での松ヶ丘遊園地の付随ケーブルカー扱いを10年版では堂ヶ島温泉への公共交通扱いに変更している。（後述）

10年「堂ヶ島温泉…早川を隔てて松ヶ岡遊園地もあり、明星ヶ岳頂上には登ること二軒で達する。…温泉旅館大和屋ホテル（電宮の下一番、室二三、普通一泊二、三、四、五円、（ユ）四円）、対星館（電同四六、二〇三番、室二五、普通一泊三、四、五、六円、（ユ）五円）」<sup>33)</sup>

14年「堂ヶ島温泉 神奈川県足柄下郡温泉村堂ヶ島。前記宮の下から東へ急坂を下ること約半軒あり、この間ケーブルカーの便がある。往復二〇銭。…また早川を隔てて松ヶ岡遊園地もあり、明星ヶ岳頂上には登ること二軒で達する。…旅館（ユ）対星館（電同四六、二〇三番、室二五、普通一泊三、四、五、六円、（ユ）五円）、（ユ）大和屋（電宮ノ下一番、室二三、普通一泊二、三、四、五円、（ユ）三円半）」<sup>34)</sup>とケーブルカーの有料営業が明記され、当時の「乗車券」の存在も確認されている。

15年の「箱根温泉旅館組合議案及決議書綴」（温史、p427）では堂ヶ島は対星館（藤田ヨシ）、大和屋ホテル（川辺源次郎）の二軒で、昭和16年発行の『日本温泉大観』記載の情報は以下の通り。

「堂ヶ島温泉 神奈川県足柄下郡温泉村 交通小田原駅より電車又は自動車あり。名所名物 松ヶ岡遊園地、調ノ滝、夢窓國師閑居の草堂址・箱根木工細工、篠杖、旅館 対星館、大和屋ホテル、環境 標高三五七米、早川上流で河畔溪谷」<sup>35)</sup>対星館 [室数二二、収容数六〇、滞在料金五・〇~七・〇円、一・二泊料金五・〇~七・〇円、娯楽設備、撞球場、温泉プール、湯銭ナシ、湧出状態、自然湧泉の引湯、泉温五九/五〇、電話番号宮の下四六番二〇三番」<sup>36)</sup>

その後時期は特定できないが、対星館の経営主体は、この地に古くから別荘を有し、「綿糸問屋として約二百万円 of 富をもち」（S10.11.27 東朝）「多額納税者として屈指」（S10.11.27 東朝）の資産家で歌舞伎等にも理解のあった元経営者の野中家に継承された模様である。戦時中に対星館に疎開していた歌舞伎俳優の尾上梅幸は『私の履歴書』の中で館主の野中家には「父は借財があったらしい…家の経理状態がメチャメチャだったので野中さんがめんどうを見

てくれていたらしい。対星館では母と私夫婦、長女の清江と十七年に生まれて三歳になる長男の秀幸（現菊五郎）の五人ぐらしで、父だけ東京にいた』<sup>37)</sup>と疎開先となった戦時下の対星館の様子を回想している。

#### IV. 資料紹介

それでは、以下において筆者所蔵資料の写真を掲げつつ、松ヶ岡遊園・対星館の資料紹介を行う。いずれの資料もこの種の資料によくあるように発行年次の表示が一切なく、仮に示した時期も筆者の推定にとどまる。また以下の「 」内の文言は当該資料に記載されたままの表現を示す。

##### ① [資料-1] 『堂ヶ島 松ヶ岡遊園絵はがき MATSUGAOKA PARK』

写真-1は資料-1の表紙の白糸の滝の絵である。昭和5年ころ、和歌山・大阪、大正写真工芸所製、登録商標「Taisho Hato Brand」製。奉天、新京、ハルピン、釜山など植民地関係の絵はがきに大正写真工芸所の製品が多く見られる<sup>38)</sup>。

写真-2は遊園地そのものを対象とした絵はがき8組写真の1枚の①「箱根堂ヶ島松ヶ岡遊園ケーブルホーム（其一）」である。画面には真新しい「松ヶ岡ケーブルカー」との看板を掲げた建物（「簡単な食堂」などか）と、「ケーブルホーム」に停車中の車両が写っている。おそらく昭和5年といわれるケーブル開通間もない頃に松ヶ岡遊園自体が記念に発行した自社製絵はがき（袋には定価表示なし）であるので、撮影する写真家の方を見てポーズをとる観光客とは思えない服装の二人の人物は宮田家一族でもあろうか。仮に橋の袂の老人が藤左衛門、ケーブル側の若者が長男の城之輔だと仮定すると藤左衛門の病死する昭和8年1月より以前の撮影と絞り込める。

組写真には②「温泉プール（其二）」、③「松ヶ岡遊園（其三）」（滝と宮田氏別荘、後掲『箱根百景』絵葉書の「松ヶ丘遊園」写真と同一の図柄）、④「松ヶ岡遊園（其四）」（草庵前の中年男）、⑤「松ヶ岡遊園（其五）」（社）、⑥「白糸の滝（其六）」、⑦「運動場（其七）」（子供用の遊具に興ずる「湯本温泉福住」の半纏を着た中年男）、⑧「旭



写真-1 絵葉書『堂ヶ島松ヶ岡遊園絵はがき MATSUGAOKA PARK』



写真-2 絵葉書「箱根堂ヶ島松ヶ岡遊園ケーブルホーム（其一）」

の滝（其八）」を収録するが、なぜか同一経営の対星館の写真は含まれない。各旅館からの送客を見込む上では対星館系統の色彩を消した中立的遊園施設を標榜するほうが得策であったためかもしれない。こうした遊園地だけの絵はがきの存在自体が当該遊園地が一応観光施設として認知され、かつケーブルカーも対星館専用ではなく、あくまで遊園地のためのアクセスとして設置されていたという証拠であろう。

② [資料-2] 「箱根堂ヶ島温泉案内 茶代廃止給仕料一割・箱根堂ヶ島温泉対星館 電話宮ノ下四六番二〇三番」

写真-3は資料-2の表紙。昭和11年ころ、鉄道交通社印行。

冒頭次のような刺激的な文言から始められる。「今日これらの欠陥はスッカリ拭ひさられ『皆様の箱根』として御自由に又お気軽に御来遊を願ふやうになりました。箱根の黎明！それは先づ、現代人のデリケートな感覚を十分に呑み込んで革命的なる経営を始めた箱根堂ヶ島対星館の甦生に出発致します」

「弊館御案内…堂ヶ島の一角に、数寄をこらした和風三層楼の新しい建物があります。大小無数の客室は素より、舞台付大広間を始め、大風呂、小風呂、湯滝等何れも最新の設備をほどこしたこの建物こそ対星館の甦生せる姿であります。対星館はこの完備した建物を擁して…又所謂『茶代、祝儀』を廃止して、単に御給仕料として一割を頂戴することに致しました…堂ヶ島対星館の宿泊料-金四円、金五円、金六円、金七円。御中食料-金二円、金二円五十銭、金三円。但し此外アラカードにてお好の御料理を調理いたします。此外団体の御宿泊及御宴会等は種々御便宜取斗ひいたし、必ず御希望に沿ふやう勤めます。前以て御知らせに預かれれば係り員を伺ひさせ、御満足のゆく様御相談申上ます」

「箱根の交通機関…宮ノ下-堂ヶ島ケーブルカー 但しケーブルカーは対星館に御来遊の方に限乗車賃を頂きません。堂ヶ島は箱根の古き名所の一つであって、昔は七湯の一つとして街道に沿ふて最も盛んな処でした。其後道筋も違って宮の下国道から五丁余を下る様になりましたので歩行困難となり、自然人足も少なく段々と淋しくなると、此の仙境の勝地も追々人々に忘れらるる状態となりましたのを非常に残念に思ひ、多くの人々に此箱根の別天地の勝景を紹介せんが為に、十余万金の巨資と八ヶ月の時日を費し、宮ノ下国道より自家用ケーブルカーを布設して、交通を容易にし、松ヶ岡遊園地を開き、温泉大プール、大浴場、動物、運動器具等の設備をし、園内には有名なる白糸の滝を始め、旭日滝、調べの滝、不動の滝、三日月の滝、屏風岩、夫婦岩等取入れ、又周囲は早川の清流に取囲れて四季の花香、観賞樹あり、年中を通じて一日の行楽に適する処となりました。又足利時代有名高僧夢窓國師閑居の跡も今猶其庵現存し、館の庭内にあります。箱根に御来遊の方々は時鳥の名所堂ヶ島！幽邃閑雅の勝景堂ヶ島！堂ヶ島温泉対星館！気分よき対星館に御来館を願って置きます。…松ヶ岡遊園地御来遊の方はケーブルカー駅にて入園料として金三十銭を御払ひ下されば園内遊覧（温泉大浴場御入浴随意）又簡単な食堂もありますゆへ、一日の御清遊も出来ます」〔資料-2〕

箱根の全般的状況を述べた冒頭の割愛部分に「最近、国立公園の指定を受け」とあるので、正式指定の昭和11年2月1日以後となるはずだが、国立公園制定運動の主体・箱根振興会にも加盟する旅館主としては内定段階でのフライングの可能性もあろう。またデリケート、アラカードなどの外国語を多用するなど戦時色を感じさせる表現は見あたらず、昭和12年以前で、昭和恐慌からの回復期の発行と思われる。



写真-3 「箱根堂ヶ島温泉案内 茶代廃止給仕料一割・対星館」

文中の「甦生」は昭和恐慌時に農村甦生運動などに多用された当時の流行語で息の絶えたものがふたたび息をする意味で、更生ともいう。「対星館の甦生に出発」は経営主体の変化を暗示しているように受け取れる。昭和8年1月3日当館経営に思い入れの深かった宮田藤左衛門（73歳）が「箱根別荘で脳溢血のため死亡」（S8.1.5 東朝）し、長男宮田城之輔（明治26年9月生れ、合名会社玉屋商店社員）が家督相続した。（人名下、p67）玉屋商店代表社員就任のほか、箱根の宮田家諸事業にも当主交代に伴う変化が生じたはずである。前当主が70歳の時に巨費を投じ



て断行した自家用ケーブルカー布設の後始末も新当主に降り懸かってきたはずで、昭和6年9月に設立したばかりの合資会社対星館の経営乗切り策、昭和9年頃と推定される対星館の和風三層楼の新築など、なんらかの甦生の意味が込められているとも想像されるが、この点は経営権授受の時期を含め今後の課題である。

なお「ケーブルカーは対星館に御来遊の方に限乗車賃を頂きません」とは「遊園地御来遊の方」からは当然に「乗車賃を頂」く有料システムであったことを意味する。ただし「ケーブルカー駅」で徴収するのはあくまで営業用鉄道を意味する「乗車賃」でなく遊園施設への「入園料として金三十銭」であった。

資料-2には鳥瞰図(写真-4)、間取図、対星館全景の絵画、「浴室新築分」の絵画、大広間、客室内、玉突のほか「松ヶ岡ケーブルカー」(後掲絵葉書[資料-3]の写真-7とほぼ同一の図柄)「松ヶ岡遊園地ノ滝」(前掲絵葉書(資料-1)の「旭の滝(其八)」と同一の図柄)などの写真が収録されていることから、資料-2の刊行主体の対星館が前掲(資料-1)のフィルム原板等を保有しているため、新たに撮影せず業者に使用させたと考えられる。鉄道交通社は私鉄業界等を得意先とする東京の印刷業者で、筆者所蔵品中にも「芦之湖御案内/箱根遊船株式会社」(昭和5年以降、10年10月以前)「草軽電鉄沿線案内」(昭和16年5月以降)などがある。「芦之湖御案内」鳥瞰図(写真-5)では宮の下から堂ヶ島温泉への公共交通機関としてわざわざ「ケーブルカー」を描いている。写真-4と写真-5とを比較すると全体の構図が酷似しているので、同一業者が写真-4の原画を元に安易にリメイクした結果、偶然に駿豆鉄道系統の箱根遊船<sup>39)</sup>の案内図に松ヶ岡ケーブルカーまで描かれた可能性も高い。近接する箱根登山鉄道沿線図(昭和8~10年発行)でも自社以外の「ケーブルカー」は描かれないので異例の厚遇といえよう。

### ③ [資料-3] 「箱根 堂ヶ島温泉対星館」

「堂ヶ島温泉…名所旧跡としては…松ヶ岡遊園地がある。自然美に包まれたる堂ヶ島一万坪に人工を加味したる大遊園地内には楓、桜、梅、つつじ、さつき等四季の草木を植え動物鳥類を育ひ、大人小供の運動具を設け、大温泉プールあり、大浴場あり、周囲に滝を見る、初春には時鳥の名所として、夏はホテルの名所にして名高く、亦足利時代の名僧國師閑居の跡は猶現存す。弊館御案内…この一角に数寄をこらした和風三層楼の新しい建物こそ当対星館



写真-4 同上「箱根堂ヶ島温泉案内」(鳥瞰図部分)



写真-5 「芦之湖御案内/箱根遊船株式会社」(鳥瞰図部分)

の甦生した姿で御座居ます。大小無数の客室は素より、百畳敷の大広間を始め大風呂、小風呂、宮ノ下国道より十余万円の巨費と八ヶ月余の歳月を費し、当館経営のケーブルカーを布設する等、最新の設備を施し、お客様にお手軽に御清遊御満足を願ひ得る様、宿泊料もお客様本意に徹底的に吟味し、お茶代お祝儀等は廃止して、単にお給仕料として一割を頂戴する事に致して居ります。…御宿泊料 御一泊料（二食付）金四円 五円 六円 御一食料 金二円 二円五十銭 三円。特に団体及宴会は御希望に添ふ様御相談致します。御給仕料 御勘定の一割頂戴します」（〔資料-3〕）

まず資料-2記載宿泊料のうち金七円が資料-3では削除され、この料金体系はJTB『旅程と費用概算』昭和10年版記載とも一致するので、資料の発行時点は昭和10年以降と推定される。

資料-3には看板に「堂ヶ島温泉／堂ヶ島遊園地 道 対星館・大和屋」、建物に「堂ヶ島ケーブルカー」と書かれた「ケーブルカー宮ノ下駅」（写真-6）と、斜面にカタカナで依然「マツガオカケーブルカー」と書いた線路の全景を撮影した「ケーブルカー」、「遊園地其の一」「遊園地其の二」「遊園地其の三」「温泉プール」、対星館の各施設、箱根各名勝の写真を掲げている。私設遊園地の名前である「松ヶ岡」から地名の「堂ヶ島ケーブルカー」に変更した理由には昭和14年『旅程と費用概算』に「堂ヶ島温泉…宮の下から東へ急坂を下ること約半軒あり、この間ケーブルカーの便がある。往復二〇銭<sup>40)</sup>とあるように公共的な乗り物としての性格を強め、この時期には隣接する大和屋との何らかの連携の存在を推測させる。大和屋が戦後になって昭和27年12月13日大和屋専用索道（客貨併用）を開業した時点でこうした共同利用関係が終了したものかと思われる。



写真-6 「堂ヶ島ケーブルカー宮ノ下駅」（部分）

資料-2では松ヶ岡遊園地・松ヶ岡ケーブルカーなど松ヶ岡を冠して呼んでいたものを、資料-3発行時点では松ヶ岡を止めて堂ヶ島遊園地に変更し、ケーブルカーも「当館経営のケーブルカー」と称しており、遊園地付属のケーブルカーから旅館専用のケーブルカーに性格を微妙に変化させた様子がうかがえる。仮にこの頃に前述の野中家への対星館の経営権の授受が生じたものと仮定すると、個人別荘をベースに併設遊園地にケーブルカーを布設した前経営者の思い入れと、さほど遊園地には拘泥せず、ケーブルカーを備えた高級旅館を継承した新経営者のコンセプト

の間の差異として説明できそうである。新経営者の目からすると一般的でない松ヶ岡を地名の堂ヶ島に改称して乗客の増加をはかるのも自然の流れであろう。前述の箱根登山鉄道発行の案内でも10年版から同様の変化が読み取れ、資料-3の発行時期が10年以降であることを示唆する。またこの点での変化に関し現・対星館の総支配人・稲葉浩介氏に取材した神奈川新聞記者の最近の記事によれば「もともとは同所にあった遊園地の乗り物だったらしいが、同旅館が1930年に創業し、宿泊客用になった<sup>41)</sup>との話は時期の点を別にすれば、この仮説の骨子とも概ね符合するのではなかろうか。

また資料-3に挿入された「神代閣より調の滝を望む」写真は「平松別荘が造営された時に庭園の一部に取り込まれ」（長大）「宮田氏別荘調瀑園の構内に圍ひ込まれ」（相豆、p21）た調べの滝を室内から撮影しており、現「神代閣」の建物が「その昔、平松別荘と呼ばれた建物を客室にして」（対星）いるという連続性が一連の資料から明確になる。

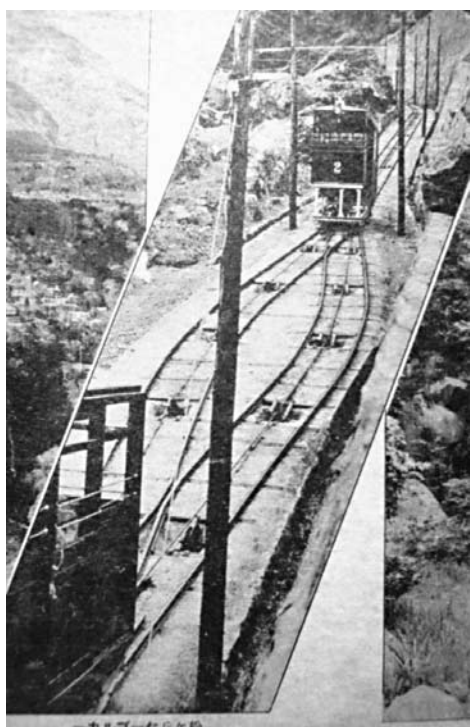


写真-7 絵葉書「松ヶ丘ケーブルカー」

- ④ [資料-4] 『箱根百景 HAKONE』 絵葉書（和歌山・大正写真工芸所製、「Taisho Hato Brand」昭和5～10年ころ）  
『箱根百景』の一枚に「松ヶ丘遊園」・「松ヶ丘ケーブルカー」（[写



写真-8 絵葉書「堂ヶ島温泉場」『箱根宮之下 HAKONE』

真-7)・「堂ヶ島温泉」(昭和初期)の三葉の写真が掲載されている。前述のように堂ヶ島ケーブルカーとは記述していない点から、発行は昭和5年以降昭和10年以前と判断した。おそらく遊園側からフィルム原板の提供を受けた絵葉書専門業者が編集した『箱根百景』に収録されていることは当該ケーブルがやはり一旅館の専用施設でなく、一応は当地の観光名所の一つと位置づけられていたことをうかがわせる。「松ヶ丘」の「丘」の字は事情に通じない第三者の絵葉書業者による「岡」との混同であるが、一般には「松ヶ岡ケーブルカー」との名称が流布していたことを示している。

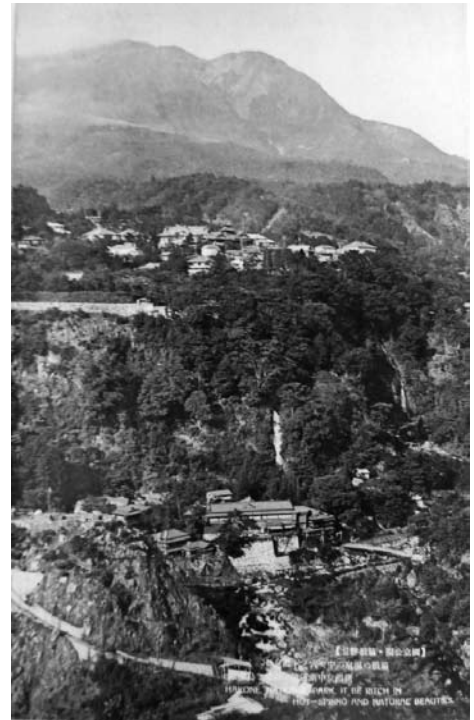


写真-9 絵葉書「箱根の温泉の中央宮の下温泉／諸温泉中幽邃第一の堂ヶ島温泉」

⑤ [資料-5] 「堂ヶ島温泉場」『箱根宮之下 HAKONE』 絵葉書 (和歌山・大正写真工芸所製、「Taisho Hato Brand」) ([写真-8])

昭和11年2月国立公園指定以前の発行であろう。堂ヶ島ケーブルカーの全路線と対星館の全景が写され、上部には写真-6の「ケーブルカー宮ノ下駅」の駅舎や、中央には2両のケーブルカーが交換する行違箇所も見える。

⑥ [資料-6] 「箱根の温泉の中央宮の下温泉／諸温泉中幽邃第一の堂ヶ島温泉」『国立公園箱根勝景』 絵葉書 (山田市「KaiGakenkyukai」製)

絵葉書 ([写真-9]) のタイトルから昭和11年2月国立公園指定以降の発行である。堂ヶ島ケーブルカーの路線下半分と対星館の全景が写され、終点の堂ヶ島ホームの駅舎も見える。

注

- (1) 拙稿「跡見流観光教育の創始と観光用画像資料の教材活用」『FDジャーナル』第9号、跡見女子大学、平成22年3月、p142～5
- (2) 本稿では長崎大学附属図書館「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」(長崎大学学術研究成果リポジトリ)を単に長大と略して本文の( )内に示したように、新聞、会社録、頻出資料等について以下の略号を用いた。商登…商業登記簿、土登…土地登記簿、[新聞・雑誌] 朝日…朝日新聞、東朝…東京朝日新聞、大朝…大阪朝日新聞、東経…東京経済雑誌、浜貿…横浜貿易新報、/[会社録] 要…『銀行会社要録』東京興信所、諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所、紳…『日本紳士録』交詢社、日韓…『日韓商工人名録』実業興信所、明治41年、大人…五十嵐栄吉『大正人名辞典』東洋新報社、大正7年、実辞…古林亀治郎編『実業家人名辞典』東京実業通信社、明治44年、丸紳…林三郎編『丸之内紳士録』丸之内新聞社、昭和6年、人鑑…大須加福市『昭和九年版 日本人名名鑑 下』連合通信社、商信…『商工信用録』東京興信所、大正3年、帝信…『帝国信用録』帝国興信所、/[頻出資料] 変遷…『本邦銀行変遷史』銀行図書館、平成10年、温誌…『箱根温泉誌』明治20年、箱鉦…『箱根鉦泉誌』明治21年、箱大…佐藤善治郎『箱根大観』明治41年、箱案…佐藤春平『箱根案内』高城寛雄発行、明治43年6月、鉄温…鉄道院『温泉案内』大正9年、鉄道省『温泉案内』昭和2年、博文館、箱図…谷口梨花(文)、吉田初三郎(画)『箱根名所図絵 箱根保勝会、温泉宿組合事務所公認』大正6年8月初版、大正14年8月五版、大参社印刷所、桜木商店発売、相豆…『相豆温泉案内誌』大参社、大正15年4月、旅館…全国同盟旅館協会編『全国旅館名簿』神田屋商店出版部、大正15年、旅名…昭和5年版『全国都市名勝温泉旅館名鑑』日本遊覧旅行社、昭和5年8月、温史…箱

- 根温泉旅館共同組合編『箱根温泉史—七湯から十九湯へ—』ぎょうせい、昭和61年、湯本…箱根湯本温泉旅館組合編『箱根湯本・塔之沢温泉の歴史と文化—』夢工房、平成12年、／[WEB]、対星…対星館ホームページ <http://www.taiseikan.co.jp> (2011年2月検索)
- (3) 大谷光瑞は明治後期に六甲山麓に広大な洋風庭園・珍しい植物を栽培した温室等を含む別荘「二楽荘」を建設、客貨輸送のため専用の第一、第二、第三ケーブルカーまで設置した。(『二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館、平成11年、p132～4) 大正7年生駒鋼索道開業のはるか前、個人で複数のケーブルカーを設置する快挙は西域探検等に見られる彼の特異な性向抜きには説明し得ないと考えている。
- (4) 近世以来豪商等の邸宅の一般開放から遊園地が発生したと考えられ、初期の不動産業のうち住宅開発は郊外の別荘地開発から出発したのも多く、広大な個人別荘そのものが専用遊園・小動物園果ては専用遊覧鉄道まで完備して遊園施設的存在であった例まで見られた。
- (5)(6)(7)(8)(9) 松本清張『蒼い描点』新潮文庫、昭和47年、p33、解説663、40、39、501～2
- (10) 晴遊閣大和屋ホテルの普通索道は昭和27年12月13日客貨併用の専用索道として開業、33年2月6日普通索道の免許を受けて(中川浩一「ロープウェイ物語(続)」『鉄道ピクトリアル』通巻138号、昭和37年11月、p34)、34年9月10日開業した。(『私鉄要覧』昭和42年、p269)
- (11) 『日本の宿』朝日新聞社、昭和52年、p167
- (12) けいてつ協会編著『知られざる鉄道』JTB キャンプックス、1997年3月、p118
- (13) 菊池芳二『箱根めぐり』箱根保勝会、大正7年、p27
- (14) 明治20年には奈良屋の名は塔之沢の旅館に見当たらない。(温史、p425) なお現対星館では明治15年購入説を採っており、「明治十五年にこの地を購入した人が『明星ヶ岳にそそり立つ館』という意味で名付けた」(前掲『日本の宿』、p167)として早川の対岸に聳える「向山(明星ヶ岳)」(温史、p135)を眺める館の意味と解している。
- (15) 両遊園は早川をはさんで隣接関係にある模様であるが、他の文献にあまり登場しない「向が丘」は早川に架けられた木橋で「向山(むこうやま)」に渡るの意か。
- (16) 拙稿「我国における観光・遊園施設の発達と私鉄多角経営の端緒—私鉄資本による遊園地創設を中心に—」『鉄道史学』第13号、平成6年12月参照。
- (17) 大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、平成3年、p277～8
- (18) 第三百二十二国立銀行頭取、平松銀行取締役、小間物商(紳 M22、p642)の平松辰之助(京橋区长沢町7)が家督相続、襲名した。
- (19)(20) 平松銀行、第三百二十二国立銀行は別稿を予定している。なお平松の創始した強羅開発の顛末は拙稿「箱根の遊園地・観光鉄道創設を誘発した観光特化型“不動産ファンド”—福原有信・帝国生命による小田原電気鉄道支援策を中心に—」『彦根論叢』第387号、平成23年3月参照。
- (21) 島順助は属性が未詳ながら同姓の島元吉は堂ヶ島の江戸屋経営者、島周吉は江戸屋の次男で写真館を開業(温史、p146)した地元有力者。
- (22) 依田学海『学海日録』学海日録研究会、岩波書店、平成5年、第10巻、p139。藤屋は底倉の地を賜った伊藤隼人介の子孫が祖先の名を取り湯房「藤屋」を始めた旧家で、明治10年には安藤勘右衛門が経営(温史、p424)していたが、山口千之助に譲り、現富士屋ホテルとなった。
- (23) 野崎左文『改正東海東山畿内山陽 漫遊案内』明治30年7月、博文館、p62
- (24) 大町桂月『関東の山水』博文館、明治42年、p476
- (25) 斎藤功「わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根—明治期を中心に—」『筑波大学人文地理学研究』、第18号、筑波大学生命環境科学研究科、1994、p140
- (26) 稲臣等編『帝国旅館全集』交通社出版部、大正2年12月、p116
- (27) 『日本案内 上』開国社、大正5年、p431
- (28) 内田星美『時計工業の発達』日本経営史研究所・セイコー時計資料館、服部セイコー、昭和60年、p198
- (29) 38年5月宮田が代表社員に就任した日本人造肥料所は「人造肥料過磷酸石灰窒素ポッター塩及過磷酸石灰の混合肥料並に硫酸等の製造販売」を目的に資本金7.5万円で南葛飾郡大木村に設立、代表社員宮田藤左衛門、小塚栄太郎(諸 M39上、p152)で、整理目的の第二会社の設立であろう。
- (30) 森永規六『趣味の名所案内』、大鑑閣、6年、p115
- (31) 金尾種次郎『関東遊覧その日帰り』金尾文淵堂、大正15年8月、p168
- (32) 堀内正夫編『箱根湯河原熱海温泉遊覧の栞』富士屋自動車、大正15年11月
- (33) 『旅程と費用概算』ジャパン・ツーリスト・ビューロー、昭和10年、p107
- (34)(40) 『旅程と費用概算』ジャパン・ツーリスト・ビューロー、昭和14年、p88
- (35)(36) 日本温泉協会編『日本温泉大観』博文館、昭和16年、p1136、p861
- (37) 『私の履歴書』文化人第14巻、日本経済新聞社、平成59年、p58
- (38) 小森孝之『絵葉書 明治・大正・昭和』国書刊行会、昭和53年、p186
- (39) 箱根遊船は元箱根村と箱根町双方の渡船組合間の抗争の仲裁を頼まれた堤康次郎が大正9年4月「全部の船頭をうって一丸とする会社をつくり、船頭を全部会社の従業員にして設立」(筑井正義『堤康次郎伝』昭和30年、p59)した。
- (41) 齊藤大起(神奈川新聞記者)「箱根の“強力”引退へ 旅館の自家用ケーブルカー」2009年5月29日『神奈川新聞』<http://railroad.kanaloco.jp/> (2011年2月検索)